

総合部会例会のお知らせ

「史料の面白さ、歴史教育の現場 ―『世界史史料』と『史料から考える 世界史二〇講』―」

報告者 鈴木茂 米山宏史

日時 二〇一五年一月三十一日（土）一四：〇〇～一八：〇〇

場所 青山学院大学青山キャンパス ガウチャーホール五階第一三会議室

JR等「渋谷駅」より徒歩一〇分、東京メトロ「表参道駅」より徒歩五分

歴史学研究会編『世界史史料』（岩波書店、二〇〇六～二〇一三年）全一二巻が完結しました。この姉妹編ともいえるべき、歴史学研究会編『史料から考える 世界史二〇講』（岩波書店、二〇一四年）も刊行されました。『史料から考える 世界史二〇講』には『世界史史料』に掲載された史料も使用されています。また、本誌でも特集「史料の力、歴史家をかこむ磁場 ―史料読解の認識構造―」（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）が組まれました（『歴史学研究』九一二～九一四号、二〇一三年一月～二〇一四年一月）。

歴史学研究会では、これらをもとに総合部会例会を開催して、歴史の面白さの鍵となる史料が、とくに教育現場でどのように使われているのかを検討してみたいと思います。高校や大学の初年次教育、あるいは市民向け講座等で、いま世界史史料がどのように使われているのか、あるいは、これからどう使ったらよいのか、について、具体的な授業実践の紹介をつうじて考えてみます。報告を鈴木茂さんと米山宏史さんにお願ひしました。報告要旨は以下の通りです。

鈴木茂「高大連携の視点から見た大学の歴史教育 ―「ラテンアメリカ史概説」の実践報告―」

学部改組に伴って、新入生向けにラテンアメリカ全体の歴史の授業を担当するようになって三年になる。受講者数も毎年一〇〇名近くにのぼり、高校「世界史」と大学での歴史研究の接続をめぐる課題もいくつか見えてきたように思われる。高校世界史教育に関するアンケート調査も踏まえながら、「史料から考える」歴史教育の現状と課題を考えてみたい。

米山 宏史「『世界史史料』を読み解く高校世界史学習の試み」

世界史学習には本来、「過去との出会い」や「世界との遭遇」など豊かな学びの可能性が秘められている。しかし、受験を意識した暗記型の授業や限られた授業時間数での通史学習の困難など多くの課題に直面している。また近年、グローバル化の進展を背景に歴史的思考力の育成が求められている。生徒の主体的な世界史認識の形成をめざして取り組んだ『世界史史料』の読解を用いた授業実践を紹介し、史料を読み解く世界史学習の有効性と課題について考えたい。